

復元された「ピアノと管弦楽のためのロンド イ長調 KV386」

武本 浩

1980年3月も終わりのある日、フランツ クサヴァー ジュースマイヤー Alan Tysonアラン タイソンは英国図書館でモーツァルトと一緒に仕事をしていた Franz Xaver Süßmayr (1766-1803) の自筆譜を調査していた。その多くは断片で、ジュースマイヤーの筆跡の楽譜もあれば写譜屋のものもあった。249枚のフォリオを調べ終えた次の瞬間、タイソンは世紀の大発見をすることになる。Add.MS32181の巻末 (fols.250-253) にあった「ジュースマイヤー作曲によるイ長調のピアノ協奏曲終結部の断章」と登録されていた4枚のフォリオ (最後の1枚は白紙) は、ジュースマイヤーのものではなく、モーツァルトの筆跡によるロンド イ長調KV386の45小節からなる終結部だったのだ。しかも、現在演奏されている終結部とは全く異にするものだったので、驚きはひとしおであった。と同時に、伝承されてきたロンド イ長調KV386の正当性を根本から見直さなければならなくなったのであった。

ロンド イ長調 KV386 の自筆譜の表紙には、モーツァルトの自筆で Rondeaux di Wolfgango Amadeo Mozart mp Viena gli 19d'Oct.^{bre} 1782 と記されている。1782年10月19日ウィーンで作曲したとの記載があることから、1782年秋から翌年にかけて開催されたアカデミー (予約演奏会) のために作曲されたと考えられている。モーツァルトはこのシーズンのアカデミーのために、イ長調 KV414 (K.³386^a, K.⁶385p), へ長調 KV413 (387^a), ハ長調 KV415 (387^b) の一連のピアノ協奏曲を作曲しており、これらの楽譜は1785年にウィーン アルターリア WienのArtariaで出版されている。これらの協奏曲の成立を1782年12月28日にザルツブルクの父に宛てた手紙でうかがい知ることができる。

いま、ぼくのコンチェルトの予約出版のために、二つの協奏曲がまだ足りません。——これらの協奏曲はむつかしすぎず、易しすぎず、ちょうどその中間です。——とても輝いていて——耳に快く——自然で、空虚なところがありません。——あちこちに——音楽通だけが満足を得られるようなパッサージュがありますが——それでも——音楽に通じていない人でも、なぜかうれしくならずにはいられないように書かれています。ぼくは予約券を——1曲6ドゥカーテンの現金で配布しています。——

イ長調協奏曲 KV414 (385p) は、アルターリアから出版された際、三連作の協奏曲の中では最も若い番号である、作品4の1として出版されていることから、1782年12月28日時点で完成している協奏曲はイ長調のものであったと考えられている。そのため、2ヶ月前に作曲された KV386 のイ長調のロンドは、KV414 (385p) のフィナーレの初稿あるいは異稿ではないかと推測されてきた。なぜなら、1782年3月3日の演奏会では、モーツァルトがザルツブルクで始めて作曲したピアノ協奏曲 KV175 (1773年作曲) が演奏されたが、その際、モーツァルトはウィーンの聴衆の趣味に合うよう、華やかなロンド ニ長調 KV382 を新たに作曲し、フィナーレとして使用したからである。しかし、1782年から1783年にかけて作曲されたこれら一連の三つの協奏曲は他の協奏曲とは少し性格が

異なるのは、次に引用する予約注文広告(ヴィーン新聞 1783年1月15日)とモーツァルトより^{パリ}Parisの出版^{ジャン-ジョルジュ シベール}社Jean-Georges Sieberに宛てた手紙(1783年4月26日)からわかる。

楽長モーツァルト氏は尊敬すべき聴衆の方々に新たに作曲されたクラヴィーア協奏曲3曲の出版を発表した。この3曲の協奏曲は管楽器を含む大管弦楽団でも、単なる四重奏、即ち、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ1とでも演奏可能であり、本年4月初めに出版される。(浄書し作曲家自身で目を通した後)予約注文者にのみ分配される。予約は今年20日から3月末までであり、4ドゥカーテンであることを付記しておこう。彼の住居はホーエン・ブリュッケ、ヘルベルシュタイニツシエ・ハウス第437の4階にある。(ヴィーン新聞, 1783年1月15日)

私は三つのクラヴィーア協奏曲を完成しております。これはフル・オーケストラで演奏できますし、オーボエ、ホルンをつけても——あるいは単に四重奏(ア・クワトロ)でも演奏可能です。(モーツァルトがジャン-ジョルジュ・シベールに宛てた手紙, 1783年4月26日)

このように、イ長調協奏曲 KV414(385p)は弦楽四重奏の伴奏でも演奏可能であるとしているが、^{オブリガート}ロンド イ長調 KV386 には低音声部から独立したobbligato[省略できない助奏]の独奏チェロパートがあり「弦楽四重奏でも伴奏可能」にはなっていない。そのため、最近では、ロンド イ長調 KV386 の表紙に記載された通り、独立した楽曲であると考えられるようになってきている。さて、このイ長調のロンドであるが、モーツァルトの死後、不幸にも数奇な運命をたどることになるのである。

1799年11月8日に取り交わされた契約に基づいて、^{オッフェンバッハ ヨーハン アントーン アンドレ}OffenbachのJohann Anton André (1775-1842)がこの楽譜をモーツァルト未亡人から他のモーツァルトの遺産と共に買い取った時には、既に最後のリーフが紛失しており、^{ゲオルク ニコラウス ニッセン}224小節までの断片だった。表紙には、das Ende fehlt(終結部は不明), zu ergänzen(未完成, Georg Nikolaus Nissenの筆跡)と記載されている。アンドレはモーツァルトの自筆譜をもとに多くの曲を、それが未完成の断章の場合は補筆完成して、出版してきた。それにもかかわらず、このロンドだけは出版しようとしなかった。224小節まで完全にオーケストレーションがなされているこの曲は未完成ではなく、終結部が不明になっているだけなので、最後のリーフが見つかるまでは出版を見合わせようと判断したのであろう。1837年4月26日、^{ヨーハン アンドレ ロンドン メサーズ コンヴェントリ ホリエ}Johann André社とLondonのMessrs. Coventry & Hollier社との間でモーツァルトが作曲した5つの断章を出版する権利を30ポンドで移転する契約が締結された。契約書のリストには、ピアノリオ KV442, ヴァイオリンソナタKV403(385°), ヴァイオリンソナタKV372, ピアノソロKV400(372^a)が記載されており、これらの断章は全てモーツァルトの死後、^{マキシミリアン シュタードラー}Maximilian Stadler(1748-1833)により補筆完成され、1830年までに^{ヨーハン アンドレ}Johann Andréから出版されたものであった。リストにはこれら4曲に続いて5番目に未出版のロンドKV386が記載されていた。1839年、これらの楽曲は^{コンヴェントリ}Coventry & ^{ホリエ}Hollier社からChefs D'Oeuvre de Mozart(モーツァルト名作集)というタイトルで出版された。この名作集のNo.10がKV442, No.11がKV400(372^a), No.12がKV372, No.13がKV403(385°)になっており、No.14はロンド イ長調KV386で、ピアニストで作曲家の^{チプリアーニ ボッター}Cipriani Potter(1792-1871)がピアノ

独奏版に編曲したものであった。1840年、自筆譜はポッターの弟子であるピアニスト兼作曲家の ウィリアム スタンディル ベネット William Sterndale Bennett (1816-1875) の手に渡った。ベネットは、手に入れた自筆譜が終結部もなく不完全だったため、ばらばらにするのをためらわなかったようで、リーフを切り取って友人に分け与えてしまった。時には一枚のリーフをさらに細かくちぎって渡すこともあったようだ。そうして自筆譜は散逸してしまった。ルードヴィヒ フォン ケッヘル Ludwig von Köchel が1862年にカタログ初版を出版したときには、もはやそれらを目にすることはできなかった。そればかりか、1838年に出版されたポッターによるピアノ編曲版の存在にも気が付かなかったのである。彼には1833年のアンドレのカタログに記載されたこの作品の出典と日付の情報しかなかった。

この魅力的な曲に大変関心を寄せた アルフレート アインシュタイン Alfred Einstein は世界中に散逸した二つの紙片の所在を初めて突き止め、136-171小節を含むこれらの自筆譜断片とポッターのピアノ編曲版を参考にして、1936年に ウィーン ウニヴェルザール エディツィオン Wien の Universal Edition よりスコアを復元した版を出版した。しかし、彼自身も言及しているように、あまりにも自筆譜の資料が少なく楽器編成すら不明であったため、自由なアレンジ以上のもではなかった。英国博物館の アレック ハイアット・キング Alec Hyatt-King によってイギリスで個人所有になっていた6枚の自筆譜断片が1956年までに発見され、1-78小節、118-132小節、136-171小節の自筆譜が利用できるようになった。1960年、ヴォルフガング レーム Wolfgang Rehm は新モーツァルト全集の中で、これら自筆譜から起こされた楽譜に、小さな音符でポッターのピアノ編曲版の楽譜を併記して出版した。1962年、パウル バドゥーラ=スコダ チャールズ マッケラス Paul Badura-Skoda と Charles Mackerras は、現存する資料からピアノと管弦楽のためのロンド イ長調の復元に取り組み、自筆譜が失われた部分はポッターのピアノ編曲版を参考にして、補筆完成版(バドゥーラ=スコダ作曲による193小節で演奏される マインツ アインガンクを含む)を Mainz の シュッツ セーネ B. Schott's Söhne から出版した。アインシュタインが復元した頃には、まだオブリガートチェロが存在する可能性をほとんど数小節(140-144小節と171小節)からしか確認することができなかったが、冒頭部分の発見でそれが明確になった。また、ピアノ編曲版では ソロ Solo [オーケストラの伴奏を伴った デュッティ 独奏部] の部分と デュッティ Tutti [オーケストラで演奏される ソロ 合奏部] の部分の区別をしばしば表示しなかったため、アインシュタインは最初に現れる長い ソロ Solo を Solo と デュッティ Tutti に分けてしまっていたが、それも訂正されることになった。新たに発見された自筆譜とポッターのピアノ編曲版を見比べてみると、ソロ Solo と同じフレーズが繰り返される デュッティ Tutti 部は厚く書かれていること、オーケストラのパートを何の但し書きも無く ソロ ソロのパスセージに取り込んでしまっていることがわかり、これらは正確な復元の手がかりとなった。ポッターはオリジナルに驚くほど忠実に編曲しているので、シュット Schott 版の編集者は、まだ行方不明の自筆譜はあるものの、類似のフレーズから容易にオリジナルを推測することができ、少なくとも90%の確度でモーツァルトのオリジナルを再現したと考えていた。

ところが、1980年、タイソンによる英国図書館での驚くべき発見は、これを完全に否定してしまった。これまでモーツァルトのものと思われてきたロンド イ長調 KV386 の終結部は、ポッターのピアノ編曲版の終結部、すなわち、ポッターの創作だったのである。現在、存在が確認できているモーツァルトの自筆譜は、表に示すように、1-78小節、101-104小節、110-115小節、118-132小節、136-171小節、225-269小節で、合計182小節になっている。自筆譜で使用された五線紙は、1782年にウィーンで製作されたもので、同じ五線紙がピアノ協奏曲イ長調 KV414 (385p) にも使用されているこ

とがわかったが、ロンド イ長調KV386と協奏曲イ長調KV414(385p)との関連付けを証明するものではなかった。

現存が確認されている自筆譜の一覧表
(編集者が出版当時、参考にできた自筆譜を○で示した)

リーフ	小節	ポッター 1838年	アインシュタイン 1936年	マッケラス, スコダ 1962年	タイソン 1989年	小節数	所有者
1	1-22	○		○	○	22	T.G.Odling
2	23-41	○		○	○	19	(私有者)
3	42-62	○		○	○	21	(私有者)
4	63-78	○		○	○	16	Royal College of Surgeons
5	79-100	○				(22)	(所在不明)
6	101-115	○			101-104 110 後半-115	15のうち 9%	The University of Western Ontario
7	116-135	○		118 後半-132	118 後半-132	20のうち 13%	T.G.Odling
8	136-154	○	○	○	○	19	Eastman School of Music
9	155-171	○	○	○	○	17	海老沢敏
10	172-224	○				(53)	(所在不明)
11		○					(所在不明)
12		○					(所在不明)
13	225-239				○	15	British Library
14	240-258				○	19	British Library
15	259-269				○	11	British Library
16	空白				○	0	British Library

1989年、タイソンは新発見の自筆譜に基づいた新版を、マッケラスによる補筆とバドゥーラ=スコダによるカデンツァ(243小節で演奏される)と新しい二種類のアインガンク(193小節で演奏される)で編集してLondonのSchottから出版した。モーツァルトの死後200年以上にわたってオリジナルな形で演奏されることのなかったこの曲が、初めて完全な形で復元されたのである。

(2006年7月12日に急逝した故荒木和典氏に捧げる, 2006年9月9日)

【参考文献】

1. Wolfgang Rehm, Rondo in A für Klavier und Orchester (Entwurf?) KV386, Bärenreiter (1960)
2. Paul Badura-Skoda und Charles Mackerras, Konzert-Rondo A-Dur KV386, B. Schott's Söhne (1962)
3. Alan Tyson, Rondo A-Dur für Klavier und Orchester K386, Schott & Co. Ltd. (1989)
4. Alan Tyson, Mozart: Studies of Autograph Scores, Harvard University Press (1987)
5. Alan Tyson, Wasserzeichen-Katalog, Bärenreiter (1992)
6. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集 V, 白水社 (1995)
7. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル編, 井本昉二訳, ドキュメンタリーモーツァルトの生涯, シンフォニア (1989)